

## 鎮守の森のターミナル

岡山市と総社市を結ぶ新しいLRT（次世代型路面電車）の駅とその広場の計画案（プロトタイプ）である。既存のJR線を LRTに転換する事業構想の一端となっており、現在は協議段階である。この計画案は、2010年に開催されたデザインコンペにおいて最優秀賞に選ばれた。

鉄道駅舎は、自然豊かな小さな町の環境では人工的になり過ぎ、浮き立つことがあるため、もっと自然に存在できるものを考えた。また、LRTは車体の床が低いので、プラットホームが地面と連続しやすく、町はこれまでのように鉄道に分断されず、駅そのものが街をつなぐ広場にとって代わることが期待できる。提案の特徴は、そうした広場を緑による建築状のボリュームで覆うことである。町の中心部に敢えてたくさんの木を植えて、大きな茂みをつくり、それをこの町の広場を兼ねた駅とするのである。樹木群の下枝はすべて刈り込み、宙に浮いた緑のボリュームの下で、たくさんの木立の幹が、人や車が自由に行き交う見通しの良いピロティ（列柱上の広場）をつくり出し、人と環境をつなぐ町のシンボルになる。内部には複数の中庭（木を植えない場所）をもち、時々上空が抜けて空が見え、広場の明るさを保つ。広場にはあまり何も置かず、その代わりに待合室や託児所、お店は、緑と共に宙に浮かせ、茂みの中に隠して一体化させる。待合室や託児所は、眼下の広場の気配を感じながら周りを緑に囲まれる。

町の中には、駅の「気配がする」森だけがあるだけである。初めて訪れる人々には一見すると気付くづらく、町の人々だけは良く知っている建築のあり方によって、町に深みと奥行をもたせようと考えた。奥行とは、古くから伝わる慣しのような地域独特の個性であるが、新しくつくる駅にもこのような性質を与えることによって、歴史が繋がっていくのではないかと考えた。

町の人々は、森へ向かう。そこへ小さな電車が、まるで鳥が巣のある木に突っ込むようにして、梢をかすめ葉を散らしながらすべりこむ。森へ向かったはずの人々は立ち消え、代わりに先ほどとは違う人の群れが森から溢れ出し町へ広がる。しだいに駅は、都市化が進む中で新しい「鎮守の森」として、静的で強い存在感を持つようになる。電車の音や、人の話し声や足音、鳥の鳴く声などが交ざって聞こえてくる一つの生態系のような駅。電車に乗らない時でも、広場を通りかかるだけで毎日の体験に一瞬だけ旅のような風通しを導く。

輪郭は、四季や時間による変化を経て乱れていくが、ある時に刈り込まれ定期的に整えられる。冬が近づくとつれ、葉がどっさりと地面に落ちボリュームは消え、広場は光に満ち溢れる。このような駅をこの路線のプロトタイプとすることによって、小さな鎮守の森がLRTの線路を伝い、ぽつぽつと隣町へと点在し、郊外の町に新しい風景を生み出す。